

産経新聞 東京朝刊 2021/01/12(火)

年頭にあたり

オピニオン

衛生は国家の基本であり、人間の死生を分かつものである。人生の究極的な目的は生理的円満をすることがある。生理的円満を可能にするものがすなわち衛生であり、そもそも国家存立の理由はこれが「衛生団体」であるからだと後藤新平はいう。

個々を超えた「公共ノ力」
後藤によれば、人間とは生理的に満足を得ようと生を彷徨う存在である。しかし、この円満は個々の人間の力では充足できない。個々の人間の力を超えた、個々の人間を生存させる「公共ノ力」、公共的秩序の形成力が不可欠だと後藤は述べる。公共的秩序の形成こそが「最上権」であり、これをもつものが「衛生団体」、つまりは國家なのだ、というのが後藤の主張である。後藤新平の国家起源説である。

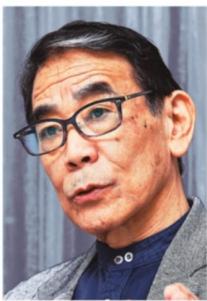
衛生といえば、人間の心身の健康維持・向上を図り、そのためには個人の私的利益の追求が自分運動を重ねていて、やがて最適解にいきつぐという予定調和的ないいのが、後藤のいう衛生とは、後藤の固有の国家觀に裏づけられたもっと広く深い概念であ

世界觀とはきわめて対照的な世界觀が後藤のものであった。後藤のこの世界觀は、明治22（1889）年、内務省衛生局の時代、32歳の時に著した『国家衛生原理』の中に顕現した。この著作の執筆を通じて思考が言説化されて思想になり信条となり、その信条が後藤の政治人生を方向づけた。

「原理」の世界觀を、後藤は單に思想として抱いただけではなく、日清戦争での勝利によって日本に割譲された海外領土・台湾の經營のための施策の基本にこれをおいたのである。

後藤にとって、衛生とは人間の生存を図るために社会的機能のすべて、生存競争と適者生存を促すための法・制度・組織・医療・上下水道・インフラなどの全領域を網羅する。後藤が総督府民政長官として赴任した頃の台湾は「瘴癪の地」といわれていた。「瘴」とは南方の

コロナ禍の中の「国家衛生原理」



公益財団法人
オイスカ会長
渡辺 利夫

山川の毒気によって起る病、「瘴」とは流行病のことである。マラリア、ペスト、コレラなど熱帯・亜熱帯地域にはびこる疫病である。往時の台湾は典型的な瘴癪の地であった。後藤は、上下水道や病院の建設、衛生観念と医学知識の普及に努めて日本による台湾統治の帳を開いた。

新型コロナウイルスの制圧に確かに実績を残したのが台湾である。台湾はワイルスの発生源の中

国と密接な関係にありながら、い

まなお感染者、重症者、死者を総

数でみても比率でみても世界で最も低い水準に抑え込んでいる。

なぜそのような成果を台湾が手

にできたのか。初動対応、マスク

供給など医療体制、情報の収集な

らびに公開政府に対する住民の

信頼などそれからみても台湾の

力には優れたものがある。台湾の

コロナの水際だった対応をみて

ると、その底の底には日本統治時

代の50余年の間に台湾の地に埋め

込まれた社会秩序と社会規範があ

ることと思われる。台湾の

コロナの水際だった対応をみて

ると、その底の底には日本統治時

代の50余年の間に台湾の地に埋め

込まれた社会秩序と社会規範があ

ることと思われる。台湾の